

平成 16 年度 文部科学省委託事業

豊かな体験活動推進事業
(「地域間交流の実施」)

実 施 報 告 書



宮崎県延岡市立恒富小学校

目 次

はじめに

委託要項 1

地域及び学校の概要 2

研究のねらい 3

全体計画 3

体験活動の実際

1 豊かな体験活動inむかばき 4

2 豊かな体験活動inもろつか 7

3 豊かな体験活動inのべおか 11

学校支援委員会 13

学校支援ボランティア 13

研究の成果と今後の課題 14

は じ め に

本校は昨年度から2ヶ年「豊かな体験活動推進事業 - 地域間交流推進校」(文部科学省)の委託を受けて、テーマに「自然・食・勤労生産」を設定して、研究に取り組んできた。

対象は4年生と6年生で、16~17名ずつの縦割り班を編成して、1年間に3回の活動を計画した。

<第1回 - 豊かな体験活動インむかばき>

4年生と6年生の縦割り班がむかばき少年自然の家で野外炊飯とテント宿泊をした。

班全員がテント設営から食事の準備まで力を合わせないと寝床にも食事にもありつけない状況においての活動であった。これで仲間意識が少しづつ芽生えてきたようである。メインである「体験インもうつか」への基礎固めでもあった。

<第2回 - 豊かな体験活動インもうつか>

2泊3日、諸塙村での体験活動は、次のようなプログラムで進められた。

「1日目」は午前中全員体験の見学と作業の後、3つの宿泊班での独自の取組となった。

(木材加工センター)諸塙村長さんの歓迎のあいさつがあり、いよいよ体験活動が始まった。

木材のできる様子や加工された木材で建築されたモデルハウスに歓声を上げた。

(椎茸作業)ほた場では椎茸取りと重いほた木の運搬に汗を流した。そこでいただいた椎茸は夕食のおかずとして子どもたちの口に入った。

(へいだ班)里芋掘りやにっこり掘りは誰も経験がなく、地区の高齢者の方々が手取り足取り教えてくださった。また、宿泊所である古民家「へいだの里」は昔の農家の家の造りが残っているので町育ちの子どもたちにはどれも新鮮に目に映った。

(やましき班)九州山地尾根近く標高約700メートルに宿泊所「やましきの杜」はあり、見渡す限りの山また山であった。かまどで夕食の準備をして、囲炉裏を囲んで食事をした。また、薪で焚いた五右衛門風呂に入った。いい思い出となった。

(藤屋班)高齢者の指導を受けて、箸作りから夕食作りまで、直接に諸塙村の方々との交流の中で人情の温かさや農林業の様子、生活の知恵を学んだ。

「2日目」は3つの宿泊班での体験活動となった。

(へいだ班)畜産センターでの牛の世話がとても心に残るものとなった。牛舎ではふんにまみれて掃除をし、ブラッシングは、牛の肌に直接ふれて作業をしながら生きている牛の温かさや息づかいには大きな驚きがあった。

(やましき班)諸塙紙すき屋での紙すき体験はめったにない体験であった。昔からの紙の製法を知り、自分で書いた和紙は宝物として、いつまでも持ち続けることと思う。

(藤屋班)全国に名だたる椎茸栽培の村で、椎茸の選別作業に取り組んだ。選別しパック詰めしながら、どこかの食料品売り場に並べられることを実感できただろう。

「3日目」は全員体験の観察と学習があった。

(エコプログラム)ビオトープ見学など森林と人間が共生していくために、考えなければならないことやしなければならないことを学習した。自然と共に存している諸塙村の方々の話が心の奥底に響いた。

(体験発表)諸塙小学校の児童と合同の活動を通して、感じたことや学んだことを絵や作文にまとめることができた。後日、学習発表会には、お世話になった諸塙村から2名のお客さんを招いて発表をした。

<第3回 - 豊かな体験活動インのべおか>

これまでの2回の体験活動を通じて、子どもたちは、便利さに囲まれ何もできないでいた自分に気付いた。そして、食べるため、生活するために身に付けた知識や技術を試す場として、野外炊飯活動を計画した。各班とも、人手を借りずに炊飯とみそ汁づくり、椎茸料理を見事に完成させ、満足そうに食べる姿が見られた。

この体験活動は始まったばかりである。2ヶ年の取組を基礎として、これからは本校独自のプログラムをさらに工夫、開発していくかなければならない。

家族を離れ、学校を離れ、延岡を離れて、心細くなってしまったこともあると思うが、改めて自分自身のことや故郷のことを振り返るよい機会になり、価値ある体験となったことは確かである。

平成17年3月

宮崎県延岡市立恒富小学校
豊かな体験活動学校支援委員会
会長 伊東忠俊

豊かな体験活動推進事業（「地域間交流の実施」）委託要項（一部を抜粋）

1 趣 旨

子どもたちが豊かな人間性や社会性などを育むために、学校教育において様々な体験活動を充実させることが重要である。このため、都市部から農山漁村や自然が豊かな地域に出かけ、農林漁業体験や自然体験を行うなど、異なる環境における豊かな体験活動を促進するため、「地域間交流推進校」を設ける。

2 委託期間

原則として2か年とする。ただし、事業の委託は年度ごとに行うものとする。

3 推進校における体験活動の実施

推進校においては、地域や学校、児童生徒の実態を踏まえ、都市部から農山漁村や自然が豊かな地域に出かけ、農林漁業体験や自然体験を行うなど、当該学校の活動を受け入れる地域（以下「受入地域」という。）との連携の下、異なる環境における一定期間まとまった体験活動を行う。

(1) 実施形態

原則として学校全体又は特定の学年、学科、コース等全体で実施する。

(2) 教育課程

総合的な学習の時間、特別活動をはじめ各教科等の特性を考慮し、体験活動を教育課程に適切に位置付けての授業の一環として実施する。

(3) 体験活動の内容

次の活動例を参考に、地域間交流の観点を踏まえ、推進校において決定する。

【活動例】

- ボランティアなど社会奉仕に関わる体験活動
- 自然に関わる体験活動
- 勤労生産に関わる体験活動
- 職場・職業・就業に関わる体験活動
- 文化や芸術に関わる体験活動
- 交流に関わる体験活動
- その他の体験活動

(4) 体験活動の期間

体験活動は、年間7日間以上又はそれに相当する時間数以上行うものとし、受入地域における活動のうち、少なくともその一部については、宿泊を伴うものとする。なお、当該日数には、受入地域における体験活動に関連する、推進校の所在地における体験活動を含むことができるることとする。ただし、当該体験活動に係る事前・事後の指導は含まないものとするほか、委員会活動や係活動、部活動、有志による活動など、一部の者のみが参加する活動は含まない。

地域及び学校の概要

1 地域（延岡市）及び学校の実態

延岡市は昔「県（あがた）」と呼ばれ、五ヶ瀬川の水の恵みを受けて田畠の広がる城下町として栄えた。現在でもその名残の文化遺跡に当時の人々の生活をしのぶことができる。大正12年の日豊本線開通により、宮崎県北の文化及び経済の中心地となり、日本窒素肥料株式会社延岡工場（現旭化成）が建設され、東九州屈指の工業都市として発展してきている。

平成17年2月1日現在、本市の人口は125,247人であり、県内では宮崎市、都城市に次ぐ人口で、都市部として位置づけられる市である。本市は旭化成工業を中心とした町であるため、市内至る所に工場が建ち並び、身近に農林漁業を体験する環境には乏しい。

本校は、このような旭化成の工場に隣接した場所にあり、児童の生活環境は豊かな自然に恵まれているとは言い難い。したがって、地域間交流による農林漁業体験は、学校、児童及び保護者にとって高いニーズがあり、体験活動を通した人間性や社会性の涵養、農林漁業への興味関心の喚起は、環境教育、ふるさと教育という観点からも本校の教育課題であると考えられる。

2 受入地域（諸塙村）の実態

諸塙村は宮崎県の西部に位置し、95%を山林が占める森深き山村である。

本校が地域間交流の相手先として諸塙村を選択した理由の一つは、本村がフォレストピア宮崎構想圏域にあるということがあげられる。フォレストピア宮崎構想とは、第3次宮崎県総合長期計画の中で、宮崎県の政策目標として掲げられたものであり、次のような概念に基づいている。

近年、都市部における人口集中の結果、過密から逃れ、精神的なゆとりの場として森林が求められるようになったことから、21世紀には森林が人間の生活には欠かすことのできないような社会、つまり「森林化社会」が到来するという予兆のもとに、森林・林業を切り口とした新しい山村社会の建設を試みて山村地域の活性化を図り、県民の誰もがゆとりと豊かさを実感できる「住みよいふるさと宮崎づくり」を創造しようとするものである。
(「第1次県北フォレストピア整備基本計画」からの一部抜粋)

諸塙村は、古くから山と密接なかかわりをもちながら、山の持つ自然の力を活用し、そこに暮らす人々の英知により“新しい森林づくり”を行ってきている。また、平成16年10月には、環境問題と森林づくりを融合させた林業経営は高い評価を受け森林認証を取得した村である。したがって、本村で体験活動を実施することは、豊かな体験活動を通した環境教育、食の教育等において高い教育効果が期待できると考えた。

よって、森林を理想郷とする村づくりを進める諸塙村は、今回の豊かな体験活動の交流の受入地域として最適任であるとの判断をしたところである。

研究のねらい

絶え間なく変化する社会の様相に対して、次代を担う児童に身につけさせなければならぬ資質や能力は、自ら考え、判断し、表現して主体的に活動できる能力や豊かな人間性などの「生きる力」である。とりわけ日常生活ではなかなか体験できない自然体験の場を多く設定し、広い視野や豊かな人間性・社会性を育むことのできる活動を体験させることが必要である。

また、本校の体験活動の受入地域との連携によって、推進校・受入先の両者ともにメリットが得られる双方向的な連携や、開かれた学校づくりの実現が期待できる。さらには、児童の活動を支えてくれる保護者には「自主ボランティア活動」を行ってもらうことで、学校とPTAとの双方向的な連携も期待できる。

全体計画

1 参加学年 第4学年(42名) 第6学年(59名) 計101名

2 活動内容

回	期 日	場 所	内 容	連 携 機 関
1	7月6日 ～7日 (1泊2日)	延岡市 (宮崎県むかばき 少年自然の家)	・自然に関わる体験 活動 ・食に関わる体験活 動	・宮崎県むかばき少年 自然の家 ・恒富小保護者ボラン ティア
2	10月27日 ～28日 (2泊3日)	諸塙村内各所 (へいだの里、や ましきの杜、藤 屋他)	・自然、勤労生産に 関わる体験活動 ・食に関わる体験活 動	・諸塙村企画課 ・諸塙村教育委員会 ・恒富小保護者ボラン ティア
3	11月23日 12月3日	延岡市 (恒富小学校)	・食に関わる体験活 動	

3 教育課程上の位置づけ

すべての体験活動を「総合的な学習の時間」として位置づけて実施し、3回の活動で合計35時間を計上した。今年度は、7月から12月までの5ヶ月間で体験活動を計画した。10月の秋季大運動会や11月の学習発表会などの学校行事を行いながらの活動となつたが、次の活動への見通しやめあてをもたせることで、児童の興味・関心・意欲を持続させることができた。

体験活動の実際

1 豊かな体験活動 in むかばき

(1) 活動のねらい

児童相互が協力し合って、自らが口にする食事を作る活動を通して、異学年で編成されるグループ内の親睦を深める。

児童が自分たちで判断して行動できるようなグループ別の活動を取り入れ、自主的・自立的に活動できる能力を養う。

(2) 活動計画

ア たて割り班編成

異年齢集団(4年生と6年生)における交流を目的として、8つのたて割り班を編成した。すべての体験活動は、このたて割り班を単位として行った。

イ 事前準備学習

4年生と6年生が一緒に班活動を行うのは今回が初めてだったので、1回目の事前準備学習では、自己紹介などそれぞれのメンバーがお互いを知る活動を行った。2回目は、むかばきでの具体的な班の目標を立てたり、役割分担を決めたりする話し合いを行った。

ウ 体験活動

1日目

- ・ 貸し切りバス移動
- ・ 追跡ハイキング
- ・ テント設営
- ・ 夕食準備(野外炊飯)
- ・ キャンプファイヤー
- ・ テント泊

2日目

- ・ 朝食準備(野外炊飯)
- ・ テント撤収
- ・ 奉仕活動
- ・ 貸し切りバス移動

エ ふりかえり

今回の体験活動をふりかえり、2回目の体験活動へ向けての意欲付けを図った。

(3) 活動の実際

貸し切りバスでむかばき少年自然の家まで移動した。今回の活動では班の児童たちの親睦を中心として体験活動を行った。

ア 追跡ハイキング

まず最初の活動は追跡ハイキングである。かなりハードなコースを選択したが、4年生と6年生が励まし合いながら元気にゴールインしてきた。



(追跡ハイキングに出発 !)



(ようやくゴールイン !)

イ テント設営

次の活動はテント設営である。所員の方々に指導をしていただき、テント設営に取りかかった。6年生を中心に力を合わせてこの2日間の生活の拠点を組み立てることができた。



(テントの組み立て方を学びます)



(みんなで力を合わせて組み立てます)

ウ 野外炊飯

次は野外炊飯である。事前に分担を決め、火おこし、材料の準備等協力して活動していた。ご飯がうまく炊けるように火の番をしながら飯盒に木の棒を当てている児童や、18人分の材料を用意する児童など手際よく作業を進めていた。そして、かなりの時間をかけてできあがったカレーを満足げに食べていた。



(材料の準備)



(火おこしと火の番)



(できあがったカレーの配膳)

エ キャンプファイヤー

夜にはキャンプファイヤーを行った。事前に昼休み等に集まって練習した歌や劇を披露し、あっという間に時間が過ぎていった。翌日はテントを撤収した後、奉仕活動をし、むかばき少年自然の家を後にした。

才 児童の感想

私は、むかばきで、料理をがんばりました。六日の夜、カレーの材料を切る時、始めはなかなかうまく切ることができませんでした。でも、同じ班の六年生が優しく教えてくれました。そのおかげで、少しずつうまく切れるようになりました。とてもうれしかったです。カレーができあがりみんなで食べてみると、とてもおいしかったです。ご飯もやわらかくておいしく炊くことができました。七日の朝は、おみそ汁を作りました。野菜を切る時、六年生から教えてもらったことを思い出しながらがんばりました。すると、カレーを作った時よりも、うまく切ることができました。玉ねぎを切る時は、目が痛くなりました。でも、最後までがんばりました。みんなで作ったおみそ汁は、とってもおいしかったです。じゃがいも、玉ねぎ、なすもとてもやわらかくて、みんなたくさん食べていました。私は、むかばきでの体験を通して、たくさんの六年生と仲良くなれました。もろつかでも、六年生と協力して、教えてもらったことを忘れず、もっと自分から進んで行動していきたいです。（4年女児）

2 豊かな体験活動inもろつか

(1) 活動のねらい

延岡市と異なった自然豊かな環境の中で、食・環境・農林業などの体験やその他の自然体験を行うことで、豊かな人間性や社会性を育む。

(児童に提示した4つのねらい)

自分たちの住む地域とは違う地域での体験活動に進んで取り組もう。

諸塚に生きる人たちから、生活の知恵を学ぼう。

諸塚の生活にとけ込んで、いろんな地域のよさをみつけよう。

一緒に体験する友達とのきずなを強めよう。

(2) 活動計画

ア 活動計画立案までの流れ

(ア) 村企画「森のエコスクール」との提携

豊かな体験活動の大きなねらいと諸塚村の「もろつかエコツーリズム研究会」が主催して行っている「森のエコスクール」事業の趣旨がかなりの部分で一致していたため、諸塚村と提携しながら、豊かな体験活動を進めていくこととした。

(イ) 保護者への説明会

参加した4・6年生の保護者を対象に説明会を行った。内容についての説明を行い、質問や要望を受け、計画の見直し等を行った。

(ウ) 保護者の参加

保護者にも「子どもと一緒に活動しましょう」と呼びかけて、参加を募った。その結果、16名の保護者が参加し、一緒に活動したり、活動を手伝ったりしていただいた。

イ 諸塚村役場総務課との打ち合わせ

(ア) 宿泊場所等の検討

参加する児童の数が100名となり、村内の1カ所の施設に全ての子どもを宿泊させることが困難であるため、村内3カ所に分かれての宿泊をする必要が出てきた。そこで、村内にある古民家3軒、宿泊施設「六峰館」、淨覚寺の計5カ所、3地区に分かれての活動を行うこととなった。

(イ) 活動班の編成

3地区、5つの宿泊場所に分かれての活動をすることにより、全員が同じ場所で同じ体験をすることが困難となった。そのため、児童を宿泊地毎に3グループに編成し、さらにそのグループを活動しやすい人数にするために2つのグループに分けることにした。結果、1グループ13人程の6つのグループを編成し、活動することとした。

ウ 活動プログラム作成

(ア) 上述したように、3つの地区に分かれての活動を展開するために、その地区毎にプログラムを作成する必要ができた。そこで、その地域のよさを体験させるためのプログラムを諸塚村の方から提案していただきながら、学校での検討を重ね、プログラム作成に当たった。

(イ) プログラムの中には、全員が行う共通プログラムとその地区でしか行わない特別プログラムの2種類から構成された。互いに離れた場所であるために、移動時間等を考慮したものになった。

エ 活動プログラム

	へいだ班（34名）	やましげ班（34名）	藤屋班（33名）
一 日 目	木材加工センター見学 森の国しいたけ「しいたけホタ夕場作業体験」		
	里芋，にっけい掘り	古民家周辺散策	竹細工（箸作り）
二 日 目	夕食作り	夕食作り	夕食作り
	朝食作り	朝食作り	朝食作り
三 日 目	畜産センターにて牛の世話	諸塙小と合同でお宝マップ作り	諸塙小と合同でお宝マップ作り
	七ツ山小と合同でお宝マップ作り	諸塙紙漉き屋にて和紙漉き体験	シイタケ選別場にてシイタケ選別作業
四 日 目	古民家周辺散策	竹細工（箸作り）	里芋，にっけい掘り
	夕食作り	夕食作り	夕食作り
五 日 目	朝食作り	朝食作り	朝食作り
	ビオトープ観察とエコプログラム（森林に関する学習） ふりかえりの時間と体験発表（諸塙小の児童と合同で）		

（3）活動の実際

1・3日目は共通プログラム，2日目は3地区それぞれの特別プログラムに取り組んだ。

ア 事前指導

（ア）ねらいの明確化および活動プログラムの見通し

2泊3日の体験活動を主体的に取り組ませるために，ねらいや各班の活動プログラム等を明記したしおりを事前指導で活用した。ねらいを共通理解した後，個人のめあてを立てさせ，より有意義な体験になるようにした。また，事前指導は学級だけでなく各班でも行い，仲間意識をもたせるとともに活動プログラムや準備物の共通理解を図った。

（イ）児童の健康に関する配慮

児童の健康状態を把握するために，事前に健康調査をした。関係職員が共通理解するとともに児童や保護者が宿泊・体験活動に関して不安がないよう配慮した。

イ 諸塙での活動

（ア）共通の体験プログラム（全員体験）

木材加工センター見学

村の特産である木材を加工する作業を見学した。均一でない丸太材から最大の角材をとるコンピュータ制御の機械を間近に見ることができ，感心していた。また，年輪から樹齢がわかることを聞き，実際に確かめる児童が多くかった。



木材加工センターの見学

しいたけ作業

しいたけ団地で生産者から栽培や収穫等についての話を聞いた後，ほた木を立てかける作業をした。重いほた木もあったが，友達と協力しながら一生懸命移動させていた。



しいたけ作業

共同炊飯

各地区で採れた根菜等を使い、地域の人と班全員で食事を作った。協力して作った食事は格別であり、食欲も旺盛であった。食事作りは回を追う毎に手際がよくなつた。



共同炊飯

お宝マップ

各班で散策した宿泊地周辺の珍しい草木や遺跡等を模造紙にまとめた。作成時は、諸塙小学校4・6年児童や地域の人々にアドバイスを受けながら、交流を深めていた。

古代米の見学および森のエコプログラム

初めて見る黒い古代米を興味深く見ていた。また、年輪を使っての二酸化炭素の排出量を考えるプログラムを受講し、環境についての理解をより深めていた。



お宝マップ作り

体験発表会

活動最終日に諸塙村中央公民館で、お宝マップをもとに自分たちの体験活動を発表した。体験活動の報告・感想だけでなく、地域の人々の温かさに対しても感謝する姿が見られた。



体験発表会

(1) 地区毎の体験プログラム

薪割りと五右衛門風呂わかし・かまどでの火おこし(やましき班)



かまどで火おこし

割った薪を使い、かまどで火をおこした。どの活動も初めて体験する児童が多かったが、何度も挑戦して体験を楽しみ、いきいきと取り組んでいた。



牛の世話

牛の世話(やましき班)

諸塙村畜産センターで

牛の世話を体験した。は

じめは牛に恐る恐る触っ

ていたが、次第にえさやりやブラッシング、糞の始末等に慣れていく、牛を大変かわいがっていた。牛そのものだけでなく、えさ等初めて知ったことが多く、大変感動していた。



芋・ニッケ掘り

芋・にっけい掘り(へいだ班)

平田地区でさつま芋や

里芋、にっけい掘りをし

た。特に、にっけいは掘

った肉桂の根を洗ってか

じることを教えてもらう

と、味に親しんで根をずっと噛み続けていた。



牛の世話

紙すき（へいだ班）

古原地区で紙すきを体験した。和紙を均一に漉くのは難しく何度も挑戦し、和紙の材料が木の皮であることも驚いていた。後日自分の漉いた和紙をもらい、できあがりを確かめるとともに活動の充実を喜んでいた。



紙すき体験

竹箸作り（ふじや班）

細く割った竹を使って食事用の竹箸を作った。小刀を使うことに慣れておらず、竹箸をなめらかにするのが難しかったが、できあがると毎回の食事で使い大変喜んでいた。



竹箸作り

しいたけの選別作業（ふじや班）

特産品であるしいたけの選別・殺菌等の作業の手伝いをした。地域の人から具体的な指示を受け、児童は集中して黙々と取り組んでいた。



しいたけ選別作業

ウ 事後指導

(ア) ふりかえり

しありに書いた個人のめあての反省等を発表させたり、体験活動について話し合わせたりして、ふりかえりを行った。感動したことだけでなく、次回の体験活動につながるような反省も出していた。

(イ) 作文指導

作文や新聞に体験活動のふり返りをまとめさせた。児童は、初めての体験が大変印象深く、それぞれの思いを文章や絵等を使って感性豊かに表現していた。



学習発表会

(4) 学習発表会での発表

全校児童や保護者に体験活動の様子を発表し、体験活動のまとめとした。より主体的な発表となるよう、児童の表現した文章やことばをつなぎ合わせて群読や寸劇仕立てにし、練習に取り組ませた。また、参加しなかった児童・保護者にも内容が十分伝わるよう、活動の様子を撮影し、児童の発表に合わせて映し出した。

3 豊かな体験活動inのべおか

(1) 活動のねらい

児童相互が協力し合って食事を作る活動において、自分たちで判断して活動できるような場を設定することで、自主的・自立的に活動できる能力・態度を養う。

これまでの体験活動を通して身につけた技能や態度を生かして、児童が協力しあいながら活動することの大切さを理解させる。

(2) 活動計画

11月25日（木）	1～2校時	体育館	各班ごとに活動計画を立てる。
12月2日（木）	5校時	ジャスコ延岡ニューシティ店 家庭科室	材料の買い物 調理用具などの準備
12月3日（金）	1～5校時	家庭科室及びその周辺 恒富地区高齢者コミュニティセンター調理室	野外炊飯活動

【野外炊飯のメニュー】

ご飯 生しいたけを使った料理 みそ汁（具は話し合って決める）

【準備物】

児童の持参物

米 0.5合 軍手 箸 皿 ご飯茶碗 みそ汁椀 水筒（お茶）

学校の準備物

みそ いりこ 塩・胡椒 油 布巾 台ふき 金網 薪 マッチ 金だわし クレンザー
かまど 飯ごう 大鍋 火ばさみ

(3) 活動の実際

ア 活動計画立案

諸塚での班活動の経験を生かして6つの班で野外炊飯を行う計画を立てた。班長を中心に、みそ汁の具材や諸塚の特産品であるしいたけを使ったメニューについて決めていった。その後、準備物や当日の活動の流れについて話し合った。個人の活動プリントの他に、当日野外に掲示するように模造紙に活動計画を書いた。

イ 前日準備・買い物

材料を買う「買い物班」と道具を準備する「準備班」に分かれて活動した。「買い物班」はジャスコにて1グループ1000円以内で食材を購入した。他の班と相談しながら購入した物を分け合うなどの工夫をしていた。ジャスコには、事前に買い物をする期日や商品について連絡をした。「準備班」は、家庭科室において鍋やざるなどの調理用具を用意したり、かまどや薪のチェックをしたりした。

ウ 野外炊飯活動

「火おこし班」は家庭科室周辺でかまどに火をおこした。むかばきでの火おこしの経験を生かしながら上手に火の調節をしていた。「調理班」は家庭科室とコミュニティセンターの調理室に分かれ、食材の下ごしらえをした。各班とも4・6年生が協力しあい積極的に活動に取り組んでいた。計画から実践まで自分たちで行うことで、充実感や満足感を十分味わうことができた。



(生しいたけも買います)



(ご飯がうまく炊けたかな)



(薪割りも自分の力で)



(おいしいご飯とみそ汁のできあがり)

工 児童の感想

前日に買い出しに行ったとき、できるだけ上手に安い物をたくさん買うように計算してお金を使うことを学びました。
私は火おこしをしたけれど、むかばきで学んだことをうまく生かせたんじゃないかと思いました。自分たちだけで作ったご飯はとてもおいしかったです。家でも作ってみたいです。
活動の前日はすごく不安でした。先生達の助けを借りずに私たち子どもだけでできるのだろうかということが一番心配でした。しかし、実際に活動してみると、6年生を中心に4年生も自分から進んで取り組むことができました。今までの体験活動の中で一番みんなが協力して活動できたと思います。

学校支援委員会

1 目 的

体験活動の充実に資する取組を行う。

- ・ 体験活動の場や機会の開発
- ・ 指導者の確保
- ・ 体験活動の円滑な実施への協力

2 構成メンバー

校長（学校支援委員会会長），関係教職員

受入地域関係者（諸塚村企画課，エコツーリズム研究会）

保護者代表（PTA会長）

3 第1回学校支援委員会

期 日 平成16年8月23日

場 所 延岡市立恒富小学校

内 容 活動内容説明と協力依頼

- ・ 諸塚村の小学校との交流を計画する。
- ・ 保護者ボランティアの要請を行う。
- ・ 往路（南延岡駅～日向市駅間）で電車を利用する。
- ・ 食物アレルギーの児童についての対応策を検討する。

4 第2回学校支援委員会

期 日 平成17年3月8日

場 所 延岡市立恒富小学校

内 容 本年度の活動の反省と今後の計画

- ・ 諸塚村での体験活動は、活動内容も充実したものになり、児童にとっても、思い出深い経験になった。
- ・ ボランティアとして参加した保護者にとっても、たいへん良い経験になった。
- ・ 受入側（諸塚村）の体制がまだ慣れていない面もあったが、取組も無事にできた。受け入れる集落毎に特色があり良かった。
- ・ 平成18年度からは、5年生が参加する予定で計画を進めていく。

学校支援ボランティア

本校PTA組織の中にある「学習支援ボランティア」の代表（本校PTA会長）を学校支援委員会のメンバーとして組み入れた。豊かな体験活動事業は、学校だけで実施できるものではなく、学校が他の組織や団体と連携していくことが必要であり、この過程で、本校は学校の教育力を高めるための多くのパートナーを見つけることができた。

また、本校PTAにとってもボランティアとして様々な活動をしていく中で、「学校に協力する」という考え方から、「自らを高め、PTAの活性化を図る」という視点を

もつことができた。本年度の本事業における学習支援ボランティアの活動は「諸塙村での活動（2泊3日）」に参加するというものであるが、ボランティア参加者の感想を見ても分かるように多くの成果が得られた。



(保護者ボランティアと児童)
「やましげの杜」



(保護者ボランティアと児童)
「しいたけ選別場」

《ボランティア参加者の感想》

（前半略）保護者ボランティアの立場で気を付けることは、必要以上に手を貸さないことだと思いました。自分たちで考え、ぶつかり、迷い、知恵を出し合うことを大切にしたいと思いました。地元の方々に頼るだけでなく、協力して教え合いながらの食事づくりはとても有意義でした。他のお母さん方とも知り合え、地元の方々とも触れ合いました。このボランティアがもっとしっかりしていたら、1日でも日数を増やして、子ども達にもっと長期の体験活動をさせてあげたいと思いました。

《ボランティア参加者の感想》

何一つ不自由なく私たちは生活してきました。そんな親が子育てをしています。今は必要以上に物を与えすぎていると思います。ビデオやテレビゲームがなくても、諸塙村では、人との会話があったからこそ夜は楽しく過ごせました。朝のおいしい味噌汁をいただいた時、毎朝ぎりぎりの時間に起き、朝食もそこそこに慌ただしく子どもを送り出す・・・そんな生活を反省しました。男の子が囲炉裏で焼いてくれた魚がとてもおいしかったです。

子どもだけでなく親である私も得るものが多くあった気がします。教科書での勉強も大切だけど、こういう体験を通して教えることもこれからの中も達にとって必要だと強く思いました。



(受入地区ボランティアの方々)



(受入地区ボランティアの方々と児童)

研究の成果と今後の課題

1 研究の成果

(1) 自然とふれあい，地域住民の温もりにふれ，様々な活動を協力して行うことの大切さを身をもって知ることは，児童が潜在的にもつ「生きる力」を引き出し，ひとりひとりの成長を促す好機となった。

さらに児童や学校にとって下記のような成果が得られた。

- ア 児童が物事に対して広い関心を持つようになった。
- イ 児童の学習意欲や活動意欲が向上した。
- ウ 交流により児童のコミュニケーション能力が向上した。
- エ 児童に豊かな人間性・社会性を育む好機となった。
- オ 広範な地域と連携した開かれた学校づくりを進めることができ，学校自身の教育力を高めるための多くのパートナーを見つけることができた。
- カ 本校教職員にとって教育に対する考え方を見直す機会となり，事業のプログラム等を関係機関と連携して企画する中で，教職員としての自信と誇りをもつことができ，組織力が向上した。

(2) 過疎化・高齢化が進む山村地域においては，子供たちの受入を通じて都市部との交流を深める中で，地域の魅力や誇りを再認識し，地域活性化につながった。さらに，経済的効果をもたらすとともに情報発信のきっかけづくりとなった。

また，山村地域の人々が，自分自身がこれまで培ってきた知識や経験を子どもや教員に伝えていくという「教える立場」になることで，自らの仕事の重要性と自分自身の教育力に気づくことができ，生産意欲の向上や地域おこしの活力を得ることができたのではないかと考える。

(3) 本校 P T Aを中心としたボランティアが活動する中で，P T Aと学校との連携のあり方について考えるよい機会となった。事業のプログラムを企画する際に参画してもらうことで，単に学校側からの協力要請に応えるという体制からの脱却が図られ，P T A組織の活性化が図られた。

さらに，実際に山村地域での体験を子供たちとともにし，地域住民とふれあう中で，ボランティアである保護者自らが自分の人生観を問い合わせ直すよい機会ともなった。

2 今後の課題

- (1) 学校支援委員会を立ち上げ、綿密な計画のもと事業を実施したが、受入側との地理的な距離があり、連絡・調整にとまどう場面があった。昨年度よりかなり改善できたが、より効率的な連絡・調整の方法を今後も考えていきたい。
- (2) 費用面での個人負担がかなり大きなものになった。受入側の好意に甘える部分もあったので、予算の組み方、個人負担の軽減等について今後研究していきたい。
- (3) 哮息等の持病のある児童が多くなってきてるので、緊急体制等の研究を深めたい。また、今回食事制限のある児童が参加したが、食事や弁当提供においての体制づくりの研究が必要であると感じた。
- (4) 諸塙小学校の児童との交流活動を計画し、お宝マップ作成や体験発表の時間に行動をともにすることことができた。それぞれの学校の児童に対する目的のもたせ方や交流内容については今後検討していく必要がある。